

[-M_]

のける [+ [+MONO]o_] ⇒ { SF1 }

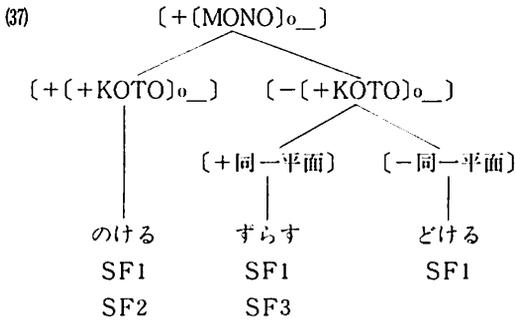
 [+ [+KOTO]o_] ⇒ SF2

 [-同一平面]

 [-M_]

⇒の矢印が、統語論的特徴と意味論的特徴の関係を

示している。また、示差性の観点からは、(37)のようになろう。



以上が、「ずらす」「どける」「のける」の意味分析である。この分析からは、まだ、三語の用法の差を説明できない部分もある。例えば、先に上げた(7)と(8)の差も、そのひとつである。しかし、それらの部分は、「1.はじめに」のおわりで述べた、三種の意味特徴の下

位特徴のうち、含蓄の特徴に属するものであると考えられる。そこで述べたように、本稿のねらいは、三種の下位特徴のうち安定度の高い統語論的特徴と意味論的特徴の両者の関係のあり方を分析しようとしたものであることを、ここでもう一度、おことわりしておく。

注(1) この分析に対して、(3)の方が、すわりが良いという情報を、ある話者(東京生まれ)から得た。ただし、その話者は、「のける」は、あまり使わないとのことであった。ついでながら、本稿の考察は、私の内省によるものである。

注(2) 「動作・作用の属性」の術語は、国立国語研究所1972による。

注(3) ここで、格文法というのは、C. J. Fillmore 1968をさしている。

注(4) 同一名詞連体修飾の定義は、奥津1974を参照されたい。

言語経歴：1954年5月名古屋市東区に生まれ、1977年3月まで名古屋。以後、横浜市港北区在住。

かえる・もどる・いぬ

酒井 恵美子

1. はじめに

国立国語研究所1964によれば、「かえる」「もどる」はともに「2.1527往復」に分類されている。しかし、「かえる」「もどる」は、往復運動の全過程をあらわしているのではなく、そうした運動の一部をあらわしているにすぎない。いくつかの辞書をたよりに、二語の共通の意味領域を考えれば、おおよそ次のようになる。〈ある場所からある場所へ、ある状態からある状態への今までとは逆方向の移動、変化〉、

私の生地徳島でも「かえる」「もどる」はほぼ同じような意味・用法をもっている。この二語は多くの文脈で互いに置換可能である。これに比べ「いぬ」は、人のある場所からある場所への今までとは逆方向の移動をあらわすだけで、意味・用法はより限定されている。

ここでは、私自身の内省により、「かえる・もどる・いぬ」の三語の意味特徴を分析し、のちに東京出身者との比較を試みたい。

2. 用法の概略

まず、簡単に意味・用法を分類しておいて、その各各を細かく検討することにする。

- (1) トランプが 裏にかえる。
- (2) ×トランプが 裏にもどる。
- (3) ×トランプが 裏にいぬ。
- (4) Iさんが 家にかえた。
- (5) Iさんが 家にもどった。
- (6) Iさんが 家にいんだ。
- (7) あて先不明で手紙が かえる。
- (8) あて先不明で手紙が もどる。
- (9) ×あて先不明で手紙が いぬ。

(1)~(9)の例文をみると、この三語のあらわしている動作により、二つのグループに分かれる。(1)~(3)では、180度回転することにより表裏が逆になっているのに対し、(4)~(9)ではそのような回転運動を必要としない、ただの平行的な移動である。言いかえれば、トランプ

の表を裏にするには、回転することが必要であるが、人、物がある場所からある場所へ移動するには、回転は必要でない。

(4)~(6)と(7)~(9)を分けているのは、動作の主体の違いである。(4)~(6)は人、(7)~(9)は物体である。

仮に、(1)~(3)のような場合を〈表裏の反転〉と名付け、(4)~(9)のような場合を〈帰着〉とする。さらに、〈帰着〉の中で、人を動作主体とし、ある場所への移動をおこなう場合を〈人の場所への帰着〉、他の場合を〈その他〉とする。〈表裏の反転〉では、そのような動作に使用される「かえる」を、〈人の場所への帰着〉では「かえる・もどる・いぬ」を、〈その他〉では「かえる・もどる」をそれぞれ中心として分析することにする。

2.1. 〈表裏の反転〉

- (10) 表札が裏に かえる。
- (11)× 表札が裏に もどる。
- (12) 卵焼きがうまく かえる。
- (13)× 卵焼きがうまく もどる。

この用法で、反転する物体は、木の葉、紙、表札、トランプ、餅等の扁平な物に限られ、サイコロのように厚みのあるものには使用できない。シャツ等を裏にむける動作にしても、縫合された立体としてではなく、布のひとつの面としてとらえ、それを反転させることで他の面を出すことに着目している。

また、反転の方向は表から裏へ、裏から表へとどちらへでも「かえす」ことができる。(12)の例のように表裏関係をもたない物体もある。日常それを上下という相対的表裏関係でとらえているのかもしれないが、この場合にしても、反転することによって他の面を出すことに特徴がある。

- (14) 表札が表に かえる。
- (15) 表札が表に もどる。

(15)でも、たとえば、いたずらされて裏向きになっていた表札が、再び表になっているような場合には使用できそうである。しかし、(11)のように表から裏への反転の場合は無理である。

つまり、(10)~(13)では、前提となる動作は必要なく、従って表札・卵焼きはそれまでに移動したことがなくともよいが、(15)では必ず前提となる移動が必要で、その移動とは反対方向への移動でなければならない。しかし、この場合「もどる」は、「かえる」のように反転して反対の面を出すことをあらわすのではなく、もどった状態にすることにポイントがおかれている。だ

から、「かえる」のように次から次へ反転を繰り返すことはできないし、卵焼き、餅のように表裏のないものを主格にとることはできない。

共通語において他動詞「かえす」は、この他に、花瓶等を垂直方向から水平方向に90度移動するという用法もある。(森田1977, p.145)

私の内省では、これらは「かやす」で表現され、このような移動を「かやる」という自動詞で表現することも可能である。

- (16) 人がつまずいて かやる。
- (17) 花瓶が かやる。

しかし、このような人や物の転倒をあらわす語としては、「こける」があり、「かやる」は使用度も少ないうえ、「かえる」と形式も似ていることからしばしば混用される。

- (18) Iさん、おかやっとなで。(Iさん、おかえりですか)

そしてこのような例を除いて「かやる」は人の場所への帰着をあらわすことはない。

ただ「かやる」については未だ分析が充分でないためここではふれないでおく。

2.2. 〈帰着〉

(i) 人の場所への帰着

ここでは、「いぬ・かえる・もどる」の三語を扱う。

(i)の用法は、人の今までとは逆方向の場所への移動をあらわす。まず、一連の動作の終結点としての帰着点について考えよう。

- (19)× デパートに忘れ物をして、いぬ。
- (20)? デパートに忘れ物をして、かえる。
- (21) デパートに忘れ物をして、もどる。
- (22)× 来る途中、おとし物をしたので、いぬ。
- (23)× 来る途中、おとし物をしたので、かえる。
- (24) 来る途中、おとし物をしたので、もどる。

「かえる」「もどる」「いぬ」はある方向への移動であるから、その移動の終結点としての帰着点をもつ。(4)~(6)のようにそれが家である場合は三語とも使用できるが、(19)(22)(23)では無理である。それでは、具体的にどのような帰着点をとらうのであろうか。

「いぬ」は、田舎・家・泊っている旅館等を帰着点とすることができる。これらはともに人の寝起きする場所である。さらに、

- (25) 出張先から、会社へいぬ。

この場合、出張先より、会社の方が、その人の長く居る生活の場所である。

(26) × 家から会社へ いぬ。

仮に、(26)が可能だとすれば、その人が会社で寝起きしている場合のみである。

つまり、「いぬ」は、人の寝起きする場所を帰着点としている。このような場所は人の生活にとって最も重要な場所、つまり生活の本拠地であるということが出来る。また「N₁からN₂へいぬ」という文脈の中では、N₂がN₁より生活の本拠地としてみとめられる場所であればよい。同様に(26)の帰着点の家であれば、可能となる。以上から「いぬ」はある場所からより本拠地たるべき場所へむけての移動であるといえる。

「かえる」は、生活の本拠地だけではない。「台所、机、椅子」等、一度立ち寄った場所であれば帰着点としてとることができる。また、「家から会社」のような場合も帰着点とすることができる。

しかし、「かえる」では、あらかじめ目的地がはっきりしていなければならない。(23)の目的地は、「落とし物がみつかる場所」であるが、それがどこであるかあらかじめわかっているわけではない。

それに対し、「もどる」の帰着点は一度通過した場所であれば、どのような地点でもよい。ただ通りすぎただけの(24)のような場合もとりうる。

次に、ある地点への逆方向の移動を、この三語は、どのように表現しているのか考えてみたい。

まず次のような状況を設定する。

BさんがA家をおとずれたとする。(I) Bさんは、A家で辞去の言葉を述べる。(II) Bさんの辞去後、すぐA家族がBさんの帰ったことを話す。(III) B家についたBさんは家人に到着の旨を述べる。

(I) (27) もう家に いにます。

(28) もう家に かえります。

(29) ?もう家に もどります。

(II) (30) Bさんは もういんだ。

(31) Bさんは もうかえった。

(32) × Bさんは もうもどった。

(III) (33) ×いま いにました。

(34) いま かえりました。

(35) いま もどりました。

(29)は、状況によっては言うようにも思うが、すわりが悪い。同じことをあらわすのだが、(II)のように完了形をとれば、(30)(31)は、A家をはなれたことを表わすのに対し、(32)は、B家にすでに到着したことをあらわす。これは、「もどる」が、出発点をはなれたことをあらわさない、もしくは、そのことに焦点をあてていないことを示している。

反対に、(33)をみると、「いぬ」は帰着点に到着したことをあらわさないことがわかる。「いぬ」は、出発点をはなれることはあらわすが、帰着点に到着することは示しえない。

「かえる」はそれらに対し、出発点をはなれることと帰着することの両方をあらわし、三語中もっとも広い意味領域をもっているといえる。^(注2)

注(1) (36) 落とし物をしたので、落とした場所までかえる。

これなら言えそうである。「かえる」が地点をはっきり示せば使えるというのは、どういうことか。

(37) 私は かえります。

上記の文をみた時、帰着点を示してはいないが、それはおそらく、家か、生活の本拠地として考えられる場所であろう。「かえる」はこのように生活の本拠地とつよくむすびついているので、その他の場合は、はっきりと地点を示さなければならないのであろう。

注(2) ここでは、地点を出発することと到着することによってポイントを置いたが、その途中の過程はどうであるか。そのことを考えるうえで、通過地点を示す資格をとるかどうかが問題になると思う。

(38) 今来た道を かえる。

(39) 今来た道を もどる。

(40) 暗い山を ひとりでかえった。

(41) 暗い山を ひとりでもどった。

「道、暗い山」であると、二語ともとることができる。

(42) Iさん宅の前を かえる。

(43) ? Iさん宅の前を もどる。

「道、暗い山」は、かなり広い地点であるが、もっとせまい「Iさん宅の前」となると、「もどる」はすわりが悪いような気がする。

(ii) その他

「かえる」「もどる」は物の貸し借りなど、物がある場所へ移動する場合につかわれる。

(44) 貸していた本が かえる。

(45) 貸していた本が もどる。

(46) 払いすぎた税金が かえる。

(47) 払いすぎた税金が もどる。

(48) 盗まれた名画が持ち主に かえる。

(49) 盗まれた名画が持ち主に もどる。

この例では、「かえる」「もどる」とともに使用でき、意味の差は感じられない。いずれも所有権に関係するようにも思える。

(50) ボールが フォワードに かえた。

(51) ボールが フォワードに もどった。

しかし、(50)(51)のように所有権とは関係のない例もいくつかみられる。

ところが、人、物、事柄がある状態に変化する場合は少し異なっている。

(52) ×意識が かえる。

(53) 意識が もどる。

(54) ×顔色が かえる。

(55) 顔色が もどる。

これらは、「もどる」だけしか用いることができない。他にも「傷口、話題、夫婦仲」等が考えられる。この変化の特徴は、(44)~(51)と比べると、なにがしかの変化があったのちのものと正常とおぼしき状態への変化であり、作為的な変化ではなく、むしろ自然なおだやかな変化である。

しかし、自然な変化と作為的な変化を分ける基準はあいまいである。

(56) 狂人が正気に かえる。

(57) 狂人が正気に もどる。

これらの例文では、この変化がはたして作為的なものかどうかかわからない。このような基準では「かえる」「もどる」を統一的に説明できないと思われる。

では状態の変化の特徴について考えてみよう。

「意識、傷口、顔色」等のものは、コントロールできるようなものではないので、良い状態もあれば、悪い状態もある。ここに逆の方向の変化が加われば、良い状態のものは悪い状態へ、悪い状態のものは良い状態へとといった変化がおこる。(52)(54)が使われないのは、変化前後の状態が明らかでないためである。

それに比べ(44)(46)(48)といった例では、本や税金は、必ず手もとから離すことがあり、ある場所へゆきつく段階があることは、一般的に、あるいは文脈のうえで知られている。これに反対の移動がおこれば、それは当然もとの場所をさすことになる。

それでも、(53)(55)の意味が通じるのは、「もどる」が語自体に「もとの状態になる」という意味を含んでいるからである。そのため、「もとの状態」さえはっきりと了解されていれば、使用できる。

その点、「かえる」は、ただ逆方向への移動変化をはじめることには焦点があり、その当然の結果としての到達点があるのであって、必ずしも、もとの状態に移動、変化することに焦点をあてていないわけではない。

(58) ? 顔色が もとにかえる。

(59) ? 意識が もとにかえる。

このように、方向を与えれば、すわりが悪いながらも可能なようである。

(60) あいさつをしたら、彼から笑顔がかえってきた。

(61) × あいさつをしたら、彼から笑顔がもどってきた。

「もどる」は「もとの状態になる」という意味があるので、はじめの状態と変化後の状態が一致しない(61)のような場合は使用することができない。「返事」「礼」も同様である。

「やまびこ」は、音声として発せられたものが山に反射してかえってくる現象である。この場合、「もどる」は使用できない。

(62) やまびこが かえってきた。

(63) × やまびこが もどってきた。

しかし、音声としては、同質のものであるので、この現象がわからない子供などは、

(64) 僕の声が もどってきた。

というであろう。

(65) 出戻り

(66) 里帰り

(65)は、生家にもどって、姓もかわり、もとの家族の一員となる場合であるが、(66)の場合は単に一時の帰省であって、身分的には婚家の一員である。

これらは、「もどる」が「もとの状態になる」ことに焦点をもち、「かえる」はそうでないことをあらわしている。

3. 徳島の「かえる・もどる・いぬ」

以上のことをまとめると次のようになる。

かえる：○扁平な物体を回転することにより、表裏が反対になること。

○あらかじめ、変化・移動を行なった物体・人あるいは、状態が逆方向への変化・移動を行ない、ある場所へ移動すること、あるいは、ある状態となること。

もどる：○変化・移動を行なった物体・人・あるいは状態が逆方向への変化・移動を行ない、もとの場所へ移動すること、あるいは、もとの状態になること。移動・変化がおこりはじめることには焦点があるのではない。

いぬ：○移動を行なった人が、より生活の本拠地としてみとめられる場所へ逆方向の移動を行なうこと。

4. 東京と徳島との比較

以上の内省による考察のうち、東京出身者との比較

を試みた。その結果次のようなことがわかった。

- 東京出身者の「かえる」「もどる」の意味特徴は、徳島出身者の私のものとほぼかわらない。
- 東京出身者は、「いぬ」という語を有しない。「いぬ」にちかい意味特徴をもつ語もみあたらない。「いぬ」をもちいる文脈では、すべて「かえる」か「もどる」におきかえることができる。

調査した東京出身者と筆者の言語歴は次の通り。

岩竹 俊一：1959年、東京都大田区菅ヶ谷生。現在に至る。

栗田 秀実：1950年、東京都台東区根岸生。1951年より文京区小日向在住。

酒井恵美子：1955年、徳島県名西郡石井町生。1962～1964年同県美馬郡脇町。1965～1972年同県名西郡石井町。1972～1977年高知市。1977年より品川区荏原在住。

かさねる・つむ

柴田 稔

1. はじめに

国立国語研究所1964「2.155.4.結び、重ね、積みなど」の項から「かさねる」と「つむ」の二語を取りあげて考えていきたい。この二語においては「何かの上になにかをおく」ということが共通にいえ。もっと広く考えれば「のせる」「ならべる」なども類義関係にあるわけだが、ここではこの二語に限って分析してみた。

2. 「かさねる」「つむ」について

2.1. 対象の形

- (1) テーブルに 皿を かさねる。
- (2) テーブルに 皿を つむ。
- (3) 机に 本を かさねる。
- (4) 机に 本を つむ。
- (5) レンガを かさねて 壁を作る。
- (6) レンガを つんで 壁を作る。
- (7) ×ボールを かさねて ピラミッド型にする。
- (8) ボールを つんで ピラミッド型にする。
- (9) ひざに 両手を かさねる。
- (10) ×ひざに 両手を つむ。

「つむ」はいろいろな形のものを対象とするが、人体(の一部)は対象となりにくい。「かさねる」は対象物どうしがある程度の広さの接触面をもち、かさねられたものの安定した状態が予想される。したがって比較的平たい、上にのせやすいものを対象とする。

2.2. 対象の質

(1)～(10)では「かさねる」「つむ」は「ものの上と同じものをのせる」ことを表わしている。そして「に」格になつ名詞はすべて場所を示していた。しかし、

- (11) ノートに 本を かさねる。

という場合「ノート」は場所を示すわけではない。また「ノート」と「本」一冊ずつでもよいわけで、このような「に」は「と」と置き換えられる。

- (12) ノートと 本を かさねる。

- (13) マットレスに ふとんを かさねる。

- (14) マットレスと ふとんを かさねる。

「かさねる」を「つむ」とは言い換えられない。「かさねる」は「一つのものの上に一つのものをおく」という点で「つむ」より用法の範囲が広いとも考えられる。(この場合の方向性については2.4.参照)しかしここで、「ノートと本」は「文房具」、「マットレスとふとん」は「寝具」というような属性を仮に考えれば、それぞれ同質のものと考えられる。また、形・大きさも似たものである。

- (15) テレビに 腕時計を のせる。

これを

- (16) テレビに / と 腕時計を かさねる。

とは言えないだろう。「かさねる」「つむ」は同質(同じような形・大きさ・性質)のものを上にのせていくことである。

2.3. 対象の数・量

- (17) 机に 本を のせる。

この場合、本は一冊でもよいが、(3)(4)では本は必ず複数で、(1)～(10)においても対象はすべて複数である。また(11)～(14)でも「ノートと本」「マットレスとふとん」のように同質のものが複数あると考えられる。ところが、

- (18)トラックに 荷物を つむ。